

本城遺跡

平成10年度箕輪町社会福祉施設建設
事業に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

2000年

長野県上伊那郡箕輪町教育委員会

本城遺跡

平成10年度箕輪町社会福祉施設建設
事業に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

2000年

長野県上伊那郡箕輪町教育委員会

序

箕輪町は、伊那谷の北部にあり、東西に聳える山々と、町の中央を南に流れる天竜川、そして河岸段丘に代表される複雑な地形とが織りなす、水と緑の自然あふれる美しい所であります。遙か先史の頃より、川や湧水などの水辺に人々が暮らしあはじめ、そして先人たちの長年にわたる努力の積み重ねによって、今日の箕輪町へと発展してきました。町内には、その証ともいえる歴史と文化を今に伝える、数多くの文化遺産があります。その文化遺産の多くは、私たちの目に触れることのできない、未知なるものが埋もれている、遺跡、古墳などの埋蔵文化財であります。

今回の調査は、町が行う社会福祉施設建設事業（松島保育所）に先立って、町教育委員会が実施しました、本城遺跡の第4回目となる緊急発掘調査です。本遺跡としては、過去3回にわたって調査が行なわれますが、前回の成果とを合せましても、まだ多くの謎が残る箕輪の原始古代を探る上で、大きな成果が上げられたものと評価できるのではないでどうか。

内容につきましては、本書の中で詳細に記しております。多くの皆さまに広く活用され、郷土の歴史解明の一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、今回の調査の実施と本書の作成に際しまして、ご理解ご協力をいただきました松島区並びに地域住民の皆様をはじめ、調査関係者の皆様方に、本書の刊行をもちまして心から感謝申し上げます。

箕輪町教育委員会

教育長 大 楓 武 治

例　　言

1. 本書は、平成10年度に実施した、長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪10,275番地2他に所在する、本城遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2. 本調査は、箕輪町教育委員会が直営で行ったものである。

3. 本書の作成にあたり、作業分担を以下のとおり行った。

遺物の洗浄・注記	——井沢はずき	福沢 幸一	宮下 容子
遺物の接合・復元	——井沢はずき	福沢 幸一	宮下 容子
遺構図の整理・トレース	——井沢はずき	根橋とし子	
遺物の実測・トレース	——井沢はずき	根橋とし子	宮下 容子
挿図作成	——井沢はずき	根橋とし子	
写真撮影・図版作成	——赤松 茂	根橋とし子	

4. 本書の執筆は、赤松 茂・根橋 とし子が行った。

5. 本書の編集は、赤松 茂・井沢はずき・根橋とし子・福沢幸一・宮下容子が行った。

6. 出土遺物及び図版類は、すべて箕輪町教育委員会が保管している。

7. 調査及び本書の作成にあたり、下記の機関からご指導ご協力をいただいた。記して感謝申し上げる。

機 関——松 島 区

凡 例

1. 遺構実測図は、以下の縮尺に統一した。

住居址・掘立柱建物址－1：60 土 坑－1：40

2. 遺物の実測図及び拓影図は、以下の縮尺に統一した。

土器実測図－1：4 土器拓影図－1：3 石器実測図－1：3、2：3
鉄 器－1：2

3. 土層及び土器の色調は、『新版 標準土色帖』を用いて記してある。

4. 土器実測図における土器の接合状況は、観察できるもののみ断面に表示してある。

5. 遺構実測図中におけるスクリーントーン表示は、以下のものを表す。

 =石断面

6. 土器実測図中におけるスクリーントーン表示は、以下のものを表す。

 =須恵器断面

 =土師器内面黒色処理

7. 土坑一覧表のNo.13・20・23～28・59は土坑消滅のため、欠番とする。現存する数値は「()」で、「-」は計測不能を表している。

8. 出土土器観察表の法量は、上から「口径・底径・器高」の順に記し、単位はセンチメートル (cm) である。また、現存する数値は「()」で、「-」は計測不能を表している。

9. 出土石器観察表の重量の単位はグラム (g) で表している。

10. 出土鉄器観察表の法量は、「長さ・幅・厚さ」の順に記し、単位はセンチメートル (cm) である。重量の単位はグラム (g) で表している。ともに現存する数値は「()」で、「-」は計測不能を表している。

本文目次

序
例　　言
凡　　例

第I章 発掘調査の概要	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調　　査　　概　　要	2
第3節 調　　査　　日　　誌	3
第II章 遺跡の環境	4
第1節 地形と地質	4
第2節 歴史環境	6
第III章 調　　査　　結　　果	8
第1節 調査方法と結果概要	8
第2節 土層堆積状況	11
第IV章 遺構と遺物	12
第1節 住居址	12
第2節 掘立柱建物址	16
第3節 土　　坑	17
第4節 遺構外出土遺物	17
第V章 まとめ	26

図　　版
報告書抄録

挿 図 目 次

第1図 調査位置図	1
第2図 地形観察図	5
第3図 周辺遺跡分布図	7
第4図 調査区設定図	8
第5図 全体図・全体図別図・トレンチ内土層断面図	9・10
第6図 土層断面図	11
第7図 1号住居址実測図	12
第8図 1号住居址出土土器・鉄器実測図	13
第9図 2号住居址実測図	15
第10図 2号住居址出土土器実測図	15
第11図 1号掘立柱建物址実測図	16
第12図 土坑実測図1	18
第13図 土坑実測図2	19
第14図 土坑実測図3	20
第15図 土坑実測図4	21
第16図 遺構外出土土器拓影図・石器実測図・鉄器実測図	22

表 目 次

第1表 周辺遺跡一覧表	6
第2表 1号住居址出土土器観察表	14
第3表 1号住居址出土鉄器観察表	14
第4表 2号住居址出土土器観察表	15
第5表 土坑一覧表	23・24
第6表 遺構外出土石器観察表	25
第7表 遺構外出土鉄器観察表	25

図 版 目 次

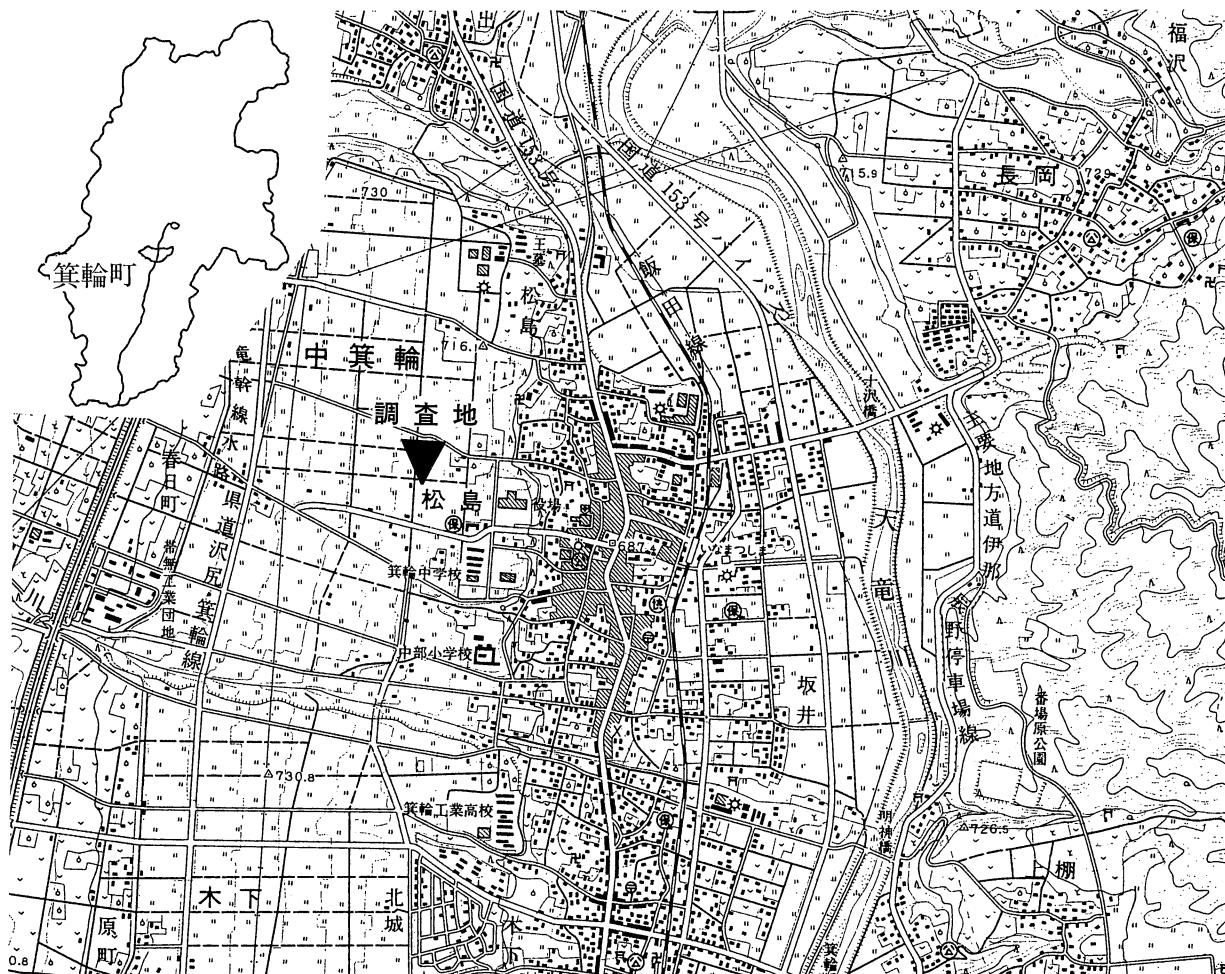
- 図版1 調査地近景（調査前・北西より）、調査区全景（北東より）、調査区土層堆積状況
- 図版2 1トレンチ、1トレンチ土層堆積状況、2トレンチ
- 図版3 2トレンチ土層堆積状況、3トレンチ、3トレンチ土層堆積状況
- 図版4 4トレンチ、4トレンチ土層堆積状況、5トレンチ
- 図版5 5トレンチ土層堆積状況、6トレンチ、6トレンチ土層堆積状況
- 図版6 1号住居址、2号住居址、1号掘立柱建物址
- 図版7 出 土 土 坑
- 図版8 出 土 遺 物

第Ⅰ章 発掘調査の概要

第1節 調査に至る経過

本城遺跡は、天竜川右岸に連なる河岸段丘の突端部にみられる遺跡群に属し、現在箕輪町役場を含む周辺に広がると思われ、当地は室町時代後期の武将である松島氏の居城跡として広く知られている。また、遺跡地の中には、町指定史跡「松島氏の墓域」がある。城は、役場が当地に移転する以前に、西天竜幹線水路の開設に伴う土地改良事業によって、かつてとどめていたと思われる城としての景観は失われたと考えられるが、役場の敷地周辺には今もなお、空堀等の遺構の一部を僅かに確認することができる。

箕輪町は、老朽化した松島西保育所と松島東保育所との統合による、「松島保育所」の新設を計画し、平成11年4月の開園を目指すこととなった。町教育委員会は、同開発の計画を受け、町文化センター西



第1図 調査位置図 (1:25,000)

側の用地約3,600m²を対象とした、同遺跡の発掘調査による記録保存を行うこととなった。

調査は、まず全域について、試掘調査による遺構・遺物の有無等の範囲確認を行い、そのうち構造物による削平範囲の本発掘調査を行った。園庭及び植栽地等の箇所については、盛土により遺構が保存されるため、試掘のみに留めた。

第2節 調査概要

1 遺跡名	ほんじよう 本城遺跡			
2 所在地	長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪10,275番地 2他			
3 調査位置	東経 137° 58' 55" 北緯 35° 54' 40" 標高 717~719m			
4 発掘調査期間	平成10年4月20日~10年6月16日			
5 整理期間	平成10年6月17日~11年3月31日			
6 事務局	教育長 藤沢健太郎(平成12年1月離任) 教育長 大槻 武治(平成12年1月就任) 参考事 柴 登巳夫(箕輪町郷土博物館館長) 主幹 唐沢喜美子(平成11年3月31日まで) 主幹 原 省吾(平成11年4月1日より) 副主幹 赤松 茂(同館学芸員) 主査 柴 秀毅(同館学芸員)			
7 調査団	団長 藤沢健太郎(平成12年1月離任) 団長 大槻 武治(平成12年1月就任) 副団長 柴 登巳夫 担当者 赤松 茂 調査員 根橋とし子 福沢 幸一 団員 井沢はずき 泉沢徳三郎 市川 俊男 井上 武雄 伊藤 裕康 井上 隆次 遠藤 茂 大槻 茂範 大槻 泰人 片桐 勇 桑原 篤 後藤 主計 小松 峰人 田中 忠男 藤沢 具明 伯耆原 正 洞口 秋人 堀 五百治 堀内 昭三 松田 貫一 宮下 容子 向山幸次郎 山田 武志			

第3節 調査日誌

5月7日（木） 調査範囲にトレーニングを8本設定し、重機にて掘削する。トレーニング内より、焼土と縄文前期の土器片がまとまって出土する。住居址も確認された。

5月14日（木） 調査団の団結式を行う。トレーニング内の上面確認と断面の壁削りを行う。さらに住居址が1軒確認された。新聞社、ケーブルテレビが取材に来る。



5月15日（金） トレーニング内の上面確認と断面の壁削りを行う。

5月19日（火） トレーニング内の上面確認と断面の壁削り、土層断面測量と写真撮影を行う。トレーニング内にカマド、土坑が確認された。

5月20日（水） トレーニング内の上面確認と断面の壁削り、土層断面測量と写真撮影を行う。

5月21日（木） トレーニング内の土層断面測量と、確認した遺構の写真撮影を行う。重機にて排土の移動を行い、その下のトレーニング内の上面確認を行う。

5月26日（火） 住居址の掘り下げを始める。土坑が40基以上と、柱穴列も確認された。

5月27日（水） 住居址の掘り下げ、土坑の半カットを行う。

5月28日（木） 住居址の掘り下げ、土坑の半カット、土層断面測量、写真撮影を行う。2号住居址は床面まで削平されていたので、遺物等の出土は少なかった。

6月2日（火） 住居址の掘り下げ、土坑の全カット、土層注記、写真撮影を行う。1・3号住居址は1つの住居址として捉えることにした。

6月4日（木） 各遺構の測量、土坑の全カット、土器の取り上げを行う。

6月8日（月） 土坑の測量を行う。

6月11日（木） 全体測量、土坑の写真撮影を行う。

6月12日（金） 住居址の写真撮影を行う。

6月16日（火） 機材を撤収し、すべてを終了する。



第II章 遺跡の環境

第1節 地形と地質

箕輪町は、東は南アルプス西は中央アルプスに囲まれ南北70kmにも及ぶ伊那盆地の北部に位置する。また諏訪湖を源とし、伊那盆地の中央低地帯を南に流れる天竜川によって、町はほぼ東西に二分された形となっている。伊那盆地は、天竜川の低地から両アルプスの山頂に至って、大起伏地帯となっており、その景観から「伊那谷」と呼ばれる。

伊那谷は本州内陸部の中でも多くの活断層が分布し、約10km幅にそれが集中する、極めて活動的な構造盆地であることがわかっている。この地形は、第四期の地殻変動によって造り上げられた。

箕輪町を含む上伊那北部の竜西（天竜川の略称で、東側は「竜東」と呼ぶ）地域では、天竜川の各支流から押し出された土石流が重なり合い、現在の複合扇状地が形成された。竜西扇状地は、伊那谷でも最も広いが、これは、上伊那南部の扇状地による土砂が天竜川をせき止めたことと、中央アルプスと交差する境峰断層により、中央アルプスの主要部が大きく西へ移動し、同様に経ヶ岳山麓の活断層帯も西へ崩れたため平な盆地が造られたという二つの理由により、両アルプスから搬出された砂や礫が盆地内に蓄えられたためとされている。

その後、扇状地が浸食され、田切地形と呼ばれる深い谷状の特徴的な地形が生まれた。箕輪町でも天



上空より遺跡地を望む（調査前）



第2図 地形観察図 (1:100,000)

竜川に注ぐ桑沢、北の沢、深沢、帶無などの各中小河川の扇状地扇端部にそれを見ることがある。

次に、箕輪町のもう一つの特徴的な地形景観である段丘に目を向けると、竜西地区では、段丘は天竜川より2ないし3列からなる、階段状の崖として確認できる。伊那谷各地でみられるこの段丘崖は、以前は天竜川が形成した河岸段丘と考えられていたが、現在では活断層の断層運動によって造りだされた断層崖ということが各地で確認されている。箕輪町でも、局地的な地質調査が進めば、この段丘がどのように形成されたかわかるであろう。一方竜東地区では、唯一沢川の造りだした扇状地の南側だけが平坦な地形である。ほかの地域は、山が近いせいもあり、変化に富んだ地形を造り上げている。特に町の最南端の福与地区では、天竜川に流れ込む中小河川が、小規模な扇状地を掘り込んだ結果、丘陵地形が配列し、地形変化を更に複雑にしている。しかしながら、現在では構造改善が進み、そういう地形の複雑な変化は、古い写真や地図で確認できるだけという場合が多く、元の地形を推測するのは難しくなってきている。地形と同じように竜東と竜西では地質の面においても非対照的で、基盤岩の質も異なる。竜東側では基盤岩を覆っている被覆層は、比較的浅く、断片的であるため、支流の谷沿いには基盤岩が広く露出し、天竜川まで続いている。竜西側では、竜東に比べ被覆層が厚いため、基盤岩の露出は少ない。また御岳テフラの終息期以後も、各支流より礫の押し出しが続き、後氷期の黒ボク土までを含む土壤と砂礫が混合して、扇状地の形成が続いたとされる。

今後箕輪町においても、遺跡を理解するために更に詳しい地質調査が必要となるであろう。

引用・参考文献

伊那市教育委員会・上伊那地方事務所 小黒南原・伊勢並遺跡 緊急発掘調査 1992.3

松島 信幸 伊那谷の造地形史 伊那谷の活断層と第四期地質 1995.3.31

第2節 歴 史 環 境

箕輪町には、東西の複合扇状地を流れる中小河川と段丘下の湧水など、水源には恵まれており、先より人が暮らしやすい格好の場が多い。町内には先人たちが残した足跡ともいいくべき多くの遺跡が散在し、現在のところ包蔵地182箇所、古墳27基、城跡13箇所が確認され、上伊那郡下において屈指の遺跡地帯として知られている。

遺跡の多くは前述のとおり、段丘及び扇状地に立地しており、特に竜西の遺跡の分布状況は、2から3段になる段丘の突端部、中小河川の両岸、山裾など、ほぼ3箇所にみられる。本年までに実施された発掘調査例を中心に概観してみると、縄文・弥生・古墳・奈良・平安の各時代の集落址や墓域を中心とした生活の痕跡、さらに町の南部の氾濫源に広がる箕輪遺跡に代表される、稲作の痕跡をみせる生産遺跡も確認されている。

今後、これらの遺跡を保護していくためにも、一帯における開発には十分注意をしていく必要がある。

第1表 周辺遺跡一覧表

遺跡番号	遺跡名	所在地	立地	時代							備考	
				旧	縄	弥	古	奈	平	中		
67	本城	松島	段丘突端		○	○	○	○	○	○		平5.6.8.10年度調査・含城跡
18	大出	大出	段丘突端		○				○		○	
19	大出南	大出	段丘突端		○				○			
20	中道南	大出	扇央		○		○	○	○			昭63年度発掘調査
61	堂地	松島	扇央	○	○	○	○	○				昭48.62.平5年度発掘調査
62	大道上	松島	扇央		○				○			平5.7年度発掘調査
63	久保林	松島	扇央					○				
64	王墓	松島	段丘突端		○		○					一部県史跡
65	王墓付近	松島	段丘突端		○				○			
66	臼杵洞	松島	段丘突端		○		○		○			
68	中山	松島	段丘突端		○				○	○		昭61.62年度発掘調査
69	藤山	松島	段丘突端		○							
70	王墓北	松島	段丘突端		○							
71	北町	松島	段丘突端		○	○	○		○	○		
72	神社付近	松島	平地		○	○			○			
73	東町	松島	段丘突端		○	○	○		○	○	○	
74	旭町	松島	段丘突端		○	○	○		○			平10年度発掘調査
75	通り町	松島	段丘突端						○			平10年度発掘調査
76	仲町	松島	段丘突端		○	○	○		○	○		平3.4.8.9年度発掘調査
77	南町	松島	段丘突端			○	○		○	○		
84	上の林	木下	段丘突端		○	○			○			昭55~57.60.平3.4年度調査
187	松島王墓古墳1号	松島	段丘突端				○					県史跡・前方後円墳
188	松島王墓古墳2号	松島	段丘突端				○					県史跡・円墳
189	仲町古墳	松島	段丘突端				○					平3年度発掘調査
210	大出城	大出	段丘突端						○			



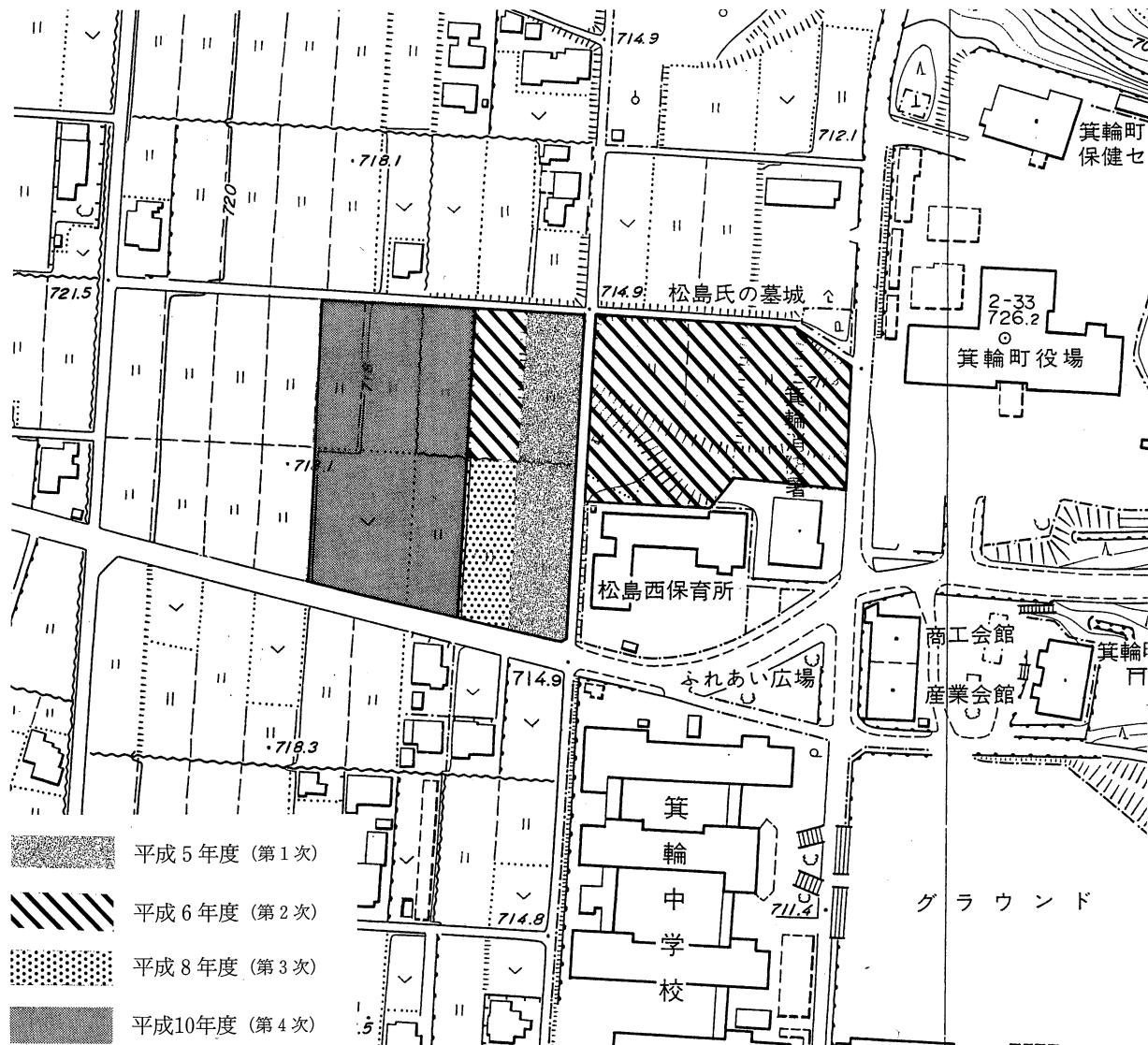
第3図 周辺遺跡分布図 (1:10,000)

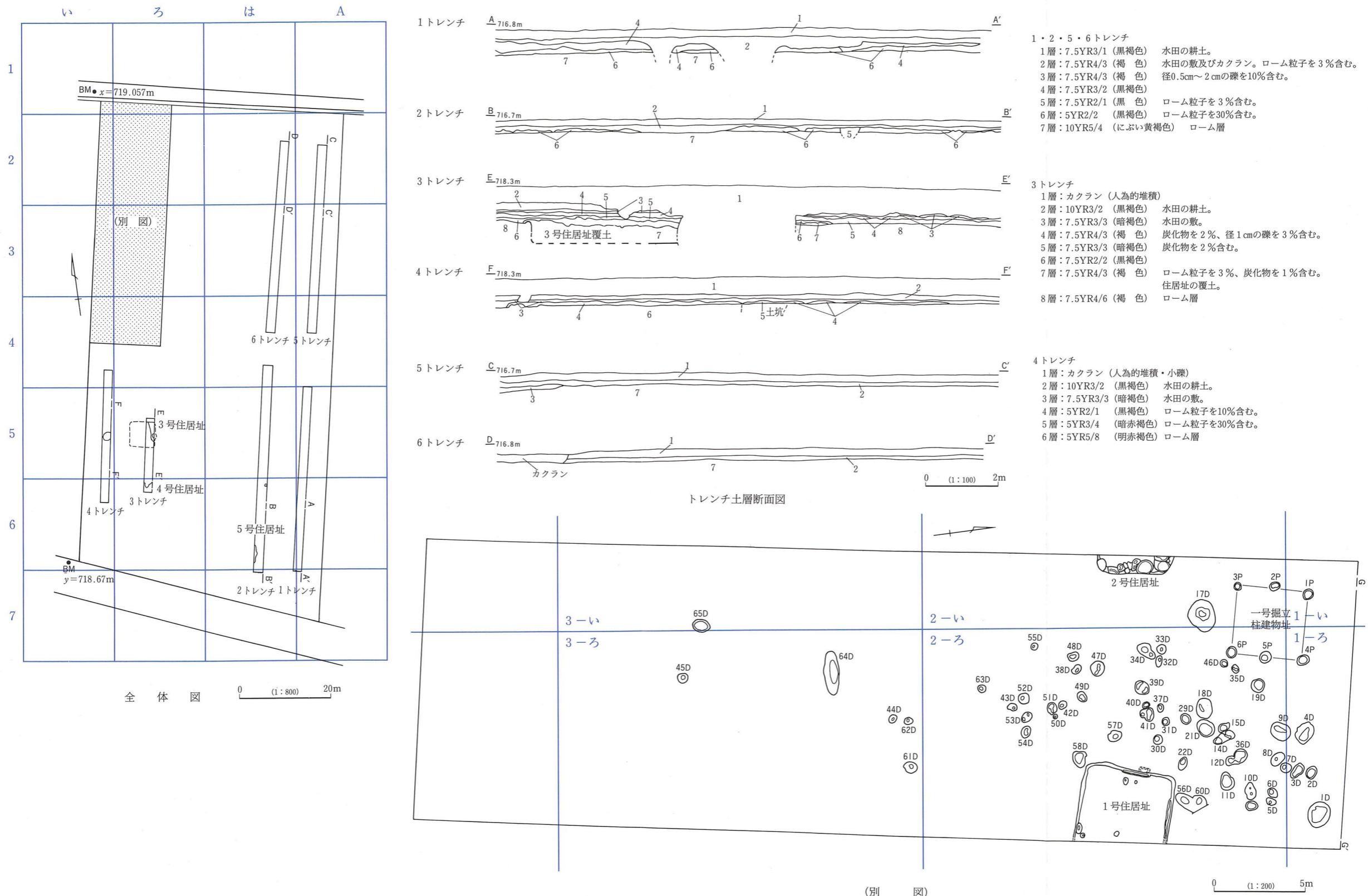
第III章 調査結果

第1節 調査方法と結果概要

今回の調査地は、昭和52年に町史跡に指定された「松島氏の墓域」の南西部に位置し、文化センター西側の水田を中心とした耕作地を用地とした、およそ3,600m²が対象範囲である。本遺跡においては、文化センター建設のための緊急発掘調査が平成5・6・8年度の3回にわたって実施されており、今回の調査では、本城遺跡の遺跡包蔵範囲限界部分の西側限界域の確認が一つの課題でもあった。

一帯は、西天竜土地改良事業によって水田に生まれ変わり、土地は削平されてる部分も予想された。





第5図 全体図・全体図別図・トレンチ土層断面図

調査は、構造物の建設範囲の本発掘調査とし、園庭等構造物建設予定外の箇所については、試掘を行って、遺構、遺物の有無の確認を図った。試掘作業では、調査区の南北方向に8本のトレンチを設定し、大型バックホーで掘削を行った。その結果、調査区の北東部にあたる5・6トレンチには、開田による削平が著しく遺構は全く確認されなかった。また、南側1～4トレンチでは、土坑や竪穴住居址を検出したが、盛土による保存がされるため、記録作業をして埋め戻した。構造物建設によって削平される北西部については、トレンチ内において遺構の確認があったため、遺構検出面の直上まで表土を除去して本発掘調査を行った。

調査の手順としては、手作業による遺構上面確認作業、各検出遺構の掘り、遺構の土層堆積状況・平面等の測量及び写真撮影による記録作業、遺物の取り上げ、全体測量であった。

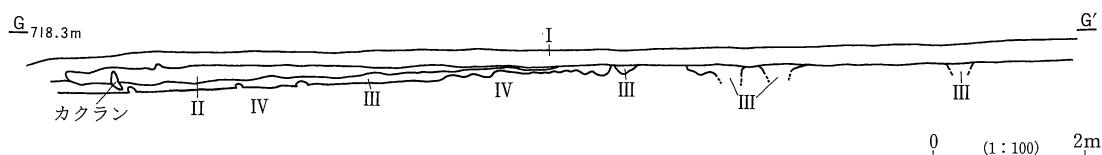
グリッドは、第1～3次調査で使用した基準点を延長し、10m四方のグリットを設定した。南北方向をローマ数字で、東西方向はいろは……を用いて呼称した。なお、基準点T1 ($x = 718.670\text{m}$)、T2 ($y = 719.057\text{m}$) をベンチマークとし、記録作業における標高を割り出した。

今回検出された遺構は以下のとおりである。

- ・竪穴住居址 — 5軒（うち3軒は試掘調査による）
- ・掘立柱建物址 — 1棟
- ・土 坑 — 56基

第2節 土層堆積状況

天竜川西岸の扇状地上における地質構造は、耕作土等黒褐色腐食土層→火山灰土層（テフラ層）→砂岩・粘板岩を主とする、砂礫層という堆積状況が普遍的に見られる。遺構の検出は、主に耕作土下の自然堆積黒褐色土、もしくはテフラの漸移層が一般的で、土地改良等による地形の削平により、テフラ確認面が遺構検出面である場合も少なくない。また遺構はテフラ層内にまで掘り込むものが多く、中には砂礫層にまで及ぶものも見られる。基本土層では、開田された箇所の測量であったため、自然堆積黒褐色土は見られなかつたが、トレンチ内ではそれが認められる箇所も確認されている。



第6図 土層断面図

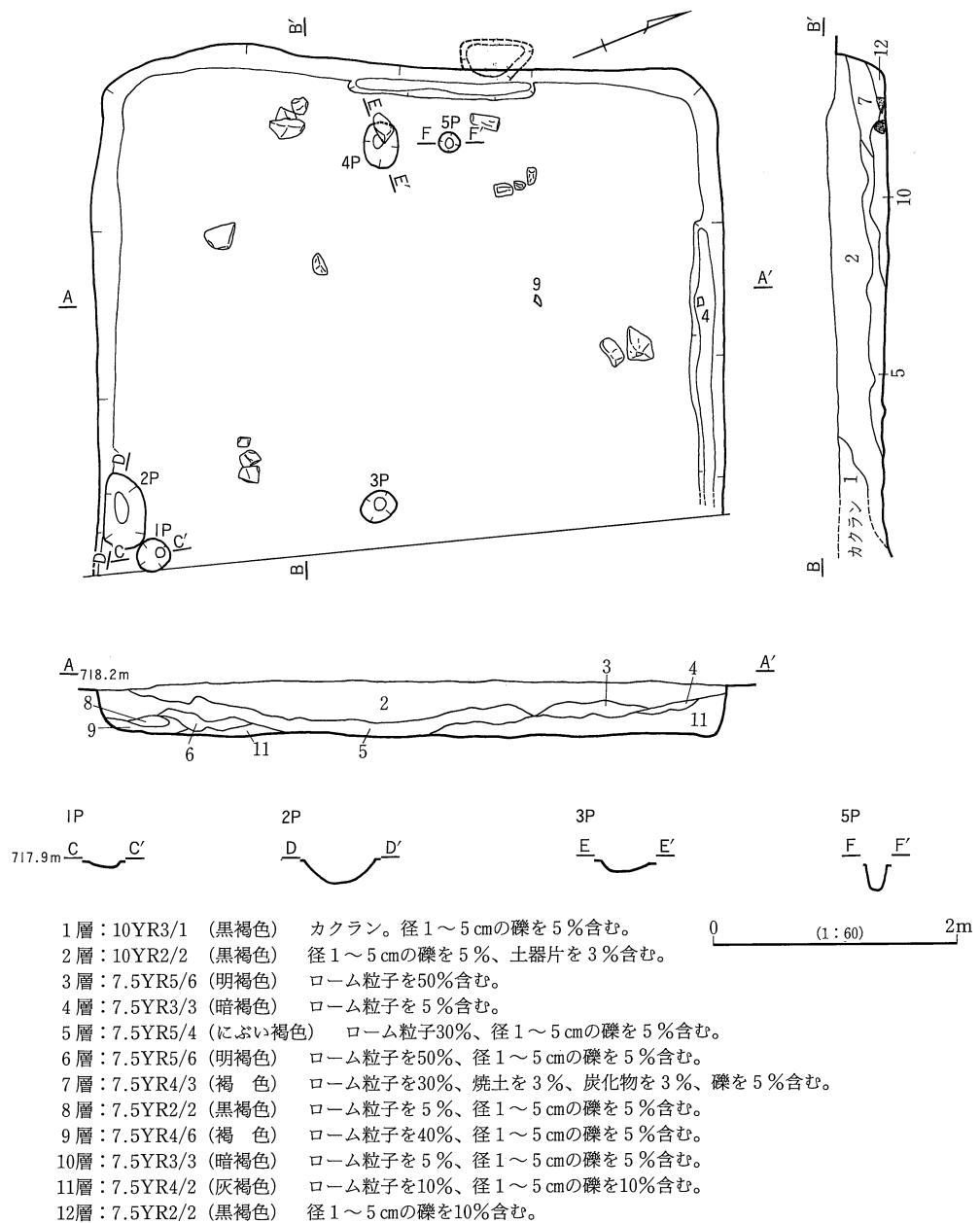
- | | | |
|------|-----------------|--------------------------|
| I層 | 黒褐色土 (7.5YR2/2) | 水田耕土。 |
| II層 | 橙色土 (7.5YR6/8) | 構造改善によると思われる人為的堆積土。 |
| III層 | 褐色土 (7.5YR4/3) | IV層の漸移層。ローム粒子を10%含む。 |
| IV層 | 明褐色土 (7.5YR5/6) | テフラ層（一般的にロームと呼ばれる火山灰土層）。 |

第IV章 遺構と遺物

第1節 住居址

1号住居址

遺構(第7図) 調査区の北西部、2-ろグリッドに位置する。プラン形状は方形を呈し、 $(3.9) \times 5.1\text{m}$ の規模である。検出箇所が水田の構造改善により削平されている境界線であるため、遺構



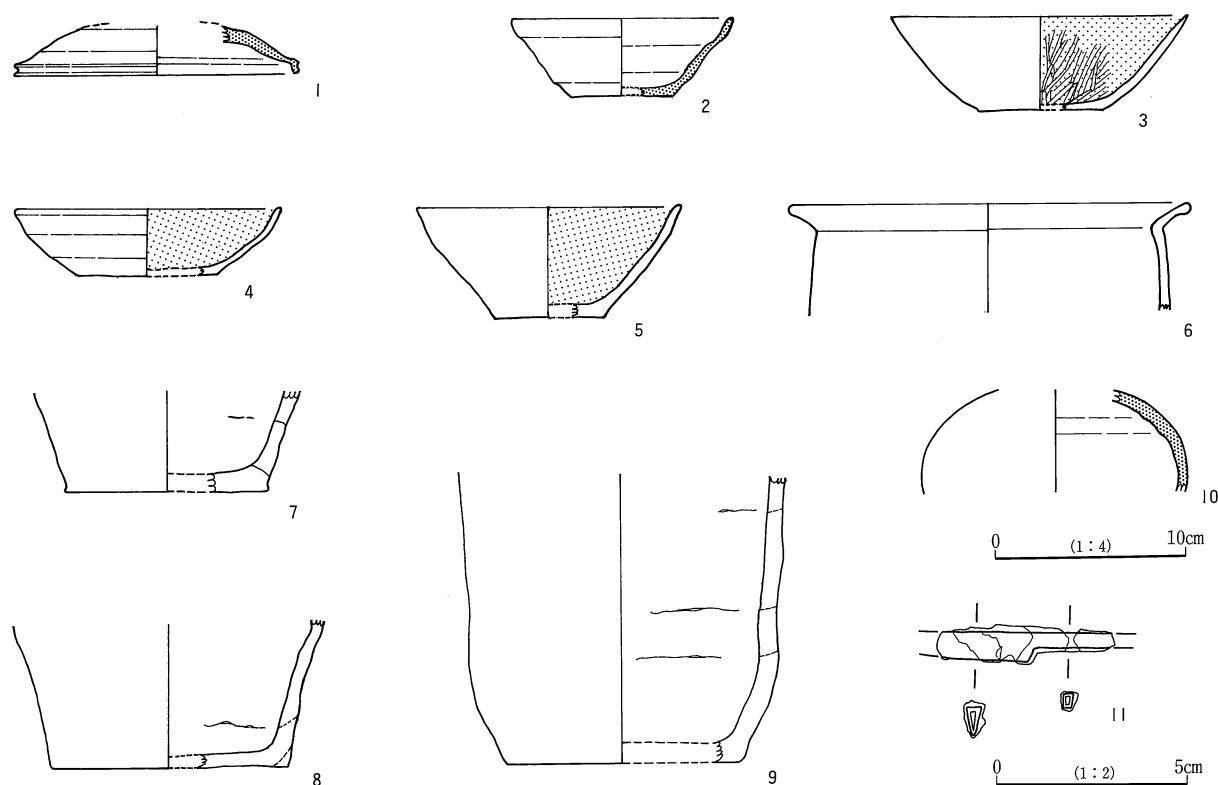
第7図 1号住居址実測図

全体規模の約70%の検出であった。

覆土は、全体的にローム粒子と5%程の礫を含み、河床化した形跡も伺われた。西壁中央には焼土を含む層も検出されたが、カマドの確認はできなかった。覆土中2層には土器片が3%含まれていた。床面は、礫を10%含み、床は南側中央部分が堅固に叩き締められていたが、全体的に覆土と変化の少ない軟弱な黒褐色土であった。壁残高は、30~40cmあまりで、掘り込みは深く、プランから床までほぼ垂直に落ち込んでいる。壁下の周溝は、北側と西側の一部の検出であった。また柱穴に相当するピットは確認していない。また、西壁中央よりやや右の壁中に、袋状の横穴が存在する。同様のものは、第1次調査で類例がみられる。

遺物 (第8図) 須恵器は壺蓋(1)、軟質須恵器の壺(2)、長頸壺(10)が、土師器はロクロ成形で内面黒色処理を施す壺(3~5)、長胴壺(6・9)、壺(7・8)の他、覆土からはロクロ成形の小型の壺がみられ、鉄器は刀子(11)が出土している。

本址は、平安時代前期に時期判定を考える。



第8図 1号住居址出土土器・鉄器実測図

2号住居址

遺構 (第9図) 調査区の北西部、2-1グリッドに位置する。本址は開田時に削平による破壊を受けており、床の一部とカマドの残骸等のみの確認であった。プラン形状は方形を呈するものと思われ、残存する東壁ラインは4.2mを計測する。カマドは、東壁中央部にブロック状の焼土が散在し、カマドの袖部を構成する芯石の痕跡と思われるピットが4穴確認された。また、その左右には、土坑状の窪みが確認された。

覆土は床直上の1層のみが僅かに残存しており、ローム粒子、炭化物、焼土が含まれていた。また、

第2表 1号住居址出土土器観察表

番号	器種	法量	器形の特徴	調整・文様	備考
1	蓋	(14.9) — (2.6)	ロクロ成形	外面ーナデ、頂部回転ヘラケ ズリ 内面ーナデ	胎土に小礫、砂粒を含む 5B5/1(青灰)
2	壺	(11.8) (5.4) (4.1)	ロクロ成形 体部は直線的に立ち上がる	外面ーナデ、底部回転糸切り 内面ーナデ	外面にすす付着、焼成不良 胎土に小礫、砂粒を含む 2.5Y6/3(にぶい黄)
3	壺	(15.6) (6.6) (5.0)	ロクロ成形 体部は内湾気味に立ち上がる	外面ーナデ、底部回転糸切り 内面ーヘラミガキ、黒色処理	胎土に雲母、小礫含む 7.5YR5/6(明褐)
4	壺	(14.1) (3.5) (7.4)	ロクロ成形 底部から内湾気味に立ち上がる	外面ーナデ、底部回転糸切り 内面ーミガキ(風化)、黒色 処理	焼成良好 胎土に雲母、砂粒を含む 5YR5/8(明赤褐)
5	壺	(13.8) (5.8) (5.9)	ロクロ成形 体部は内湾気味に立ち上がる	外面ーナデ、底部回転糸切り 内面ーナデ、黒色処理	胎土に小礫、砂粒を含む 10YR5/6(黄褐)
6	長胴甕	(21.0) — (5.7)	輪積成形 口縁部は短く外反し、胴部は 直線的に下降する。	外面ーナデ(風化) 内面ーナデ	胎土に雲母、砂粒を含む 10YR5/3(にぶい黄褐)
7	甕	— (10.5) (5.3)	輪積成形 胴部は直線的に立ち上がる	外面ーナデ、底部木葉痕 内面ーナデ(風化)	内外共にすす付着 胎土に雲母、小礫、砂粒を含む 10YR6/4(にぶい黄橙)
8	甕	— (12.4) (7.8)	輪積成形 胴部は直線的に立ち上がる	外面ーナデ(風化) 内面一風化が激しい	外面にすす付着 胎土に雲母、小礫を含む 10YR5/4(にぶい黄褐)
9	長胴甕	— (12.4) (14.9)	輪積成形 底部から内湾気味に立ち上がる	外面ーナデ(風化) 内面ーナデ	胎土に雲母、小礫を含む 7.5YR5/6(明褐)
10	長頸壺	— — (5.5)	ロクロ成形 体部は球状を呈する。	外面ーナデ 内面ーナデ	外面に釉薬付着 胎土に砂粒を含む 5BG6/1(青灰)

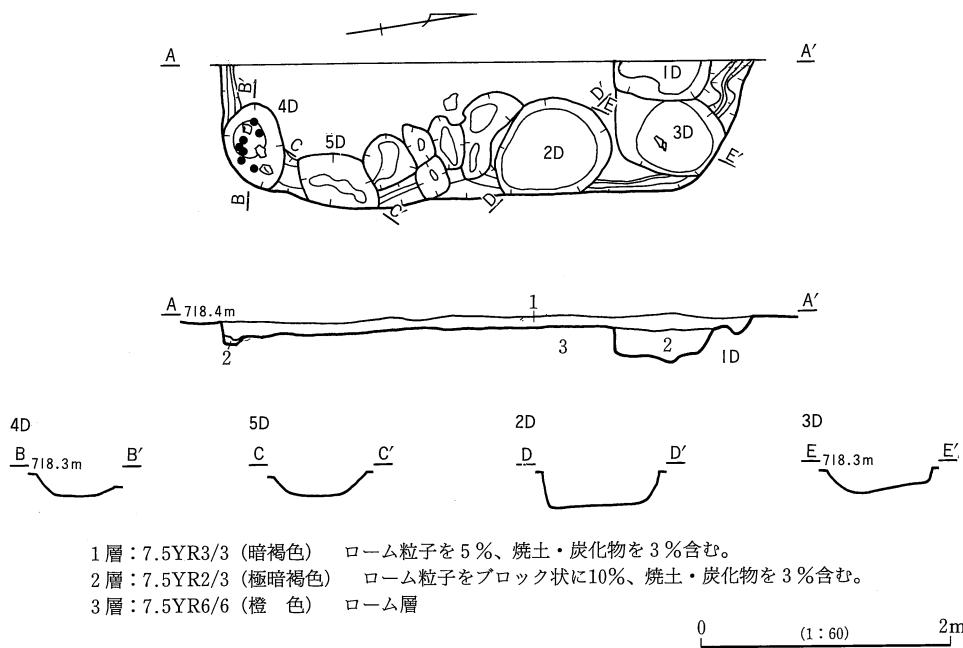
第3表 1号住居址出土鉄器観察表

番号	器種	法量	重さ	特徴
11	刀子	(4.7) 0.7 0.3	2.8	平棟平造り。関周辺のみ現存。

検出部分からは周溝と思われる痕跡が確認された。

遺物 (第10図) 土師器は甕 (1・2)、覆土から内面黒色処理の壺やハケやナデ調整の長胴甕が、須恵器 (軟質須恵器を含む) は壺を出土している。

本址は、奈良時代末から平安時代前期に時期判定を考える。



第10図 2号住居址出土土器実測図

第4表 2号住居址出土土器観察表

番号	器種	法量	器形の特徴	調整・文様	備考
1	甕	(16.5) — (4.4)	輪積成形 口縁部は緩やかに外反する	外面一口縁部ヨコナデ、体部 ヘラナデ 内面一ナデ	胎土に雲母、小礫、砂粒を含む 7.5YR5/4 (にぶい黄褐)
2	小型甕	(13.7) — (3.2)	ロクロ成形 口縁部は「く」の字に外開する	外面一口縁部ヨコナデ、体部 ハケ 内面一ナデ	胎土に砂粒を含む 5YR5/6 (明赤褐)

試掘調査で検出した住居址

試掘調査段階で検出した堅穴住居址は、2トレンチより1軒 (5号住居址)、3トレンチより2軒 (北より3・4号住居址) が確認された。3軒は、いずれもその検出状況から判断し、方形を呈するプラン形状を示すと思われるが、その規模の特定には至っていない。しかし、前にも述べたとおり保育園の園庭になる箇所であり直接破壊が及ばないため、あくまでもトレンチ内の範囲確認とその記録と、その際覆土より出土した僅かな遺物の採取を行い、その後埋め戻し、そのまま保存することとした。また、いず

れの住居址も出土した遺物は、須恵器は高台付壺、土師器は内面黒色処理の壺、ハケ調整の甕等が出土している。内部の詳しい状況が掴めないので明かではないが、奈良時代末から平安時代前期のものと考えられよう。

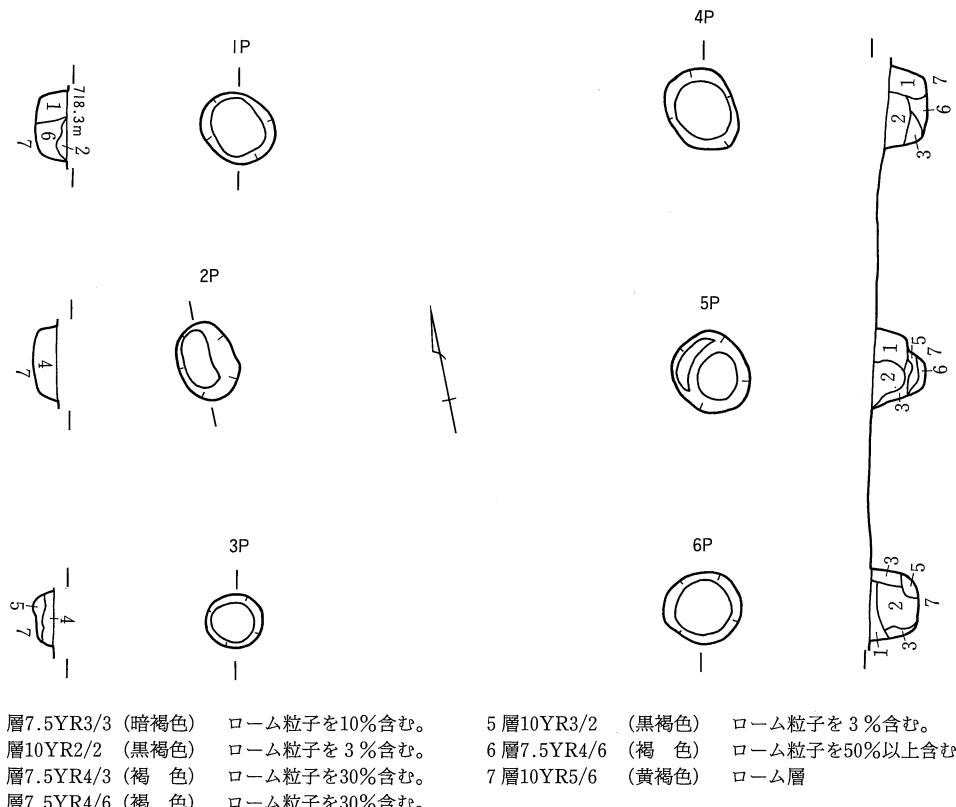
第2節 掘立柱建物址

1号掘立柱建物址

遺構 (第11図) 1・2-い、1・2-ろグリットに位置し、主軸はN-10°-Wの方向を指す。本址は長軸方向3本、短軸方向2本の柱が検出された。柱穴跡は $4.6 \times 4.3\text{m}$ (2×1 間) で、柱間は南北列で2m、東西列で3.7mを測る。しかし、検出された箇所の削平が大きいため、さらに北に柱穴がある可能性もあり、建物址としての全容はつかめなかった。柱穴の平面形はほぼ円形を呈し、その規模は1P ($61 \times 51 \times 24\text{cm}$)、2P ($63 \times 45 \times 22\text{cm}$)、3P ($44 \times 43 \times 16\text{cm}$)、4P ($70 \times 52 \times 31\text{cm}$)、5P ($67 \times 58 \times 41\text{cm}$)、6P ($60 \times 57 \times 37\text{cm}$) である。

覆土は、1P～3Pについては上部が削平されていたが、基本的には5層に分層され、柱穴底面は1P・4P・5Pについては堅く叩き締められていた。断面からは柱痕は確認できなかった。

遺物 3Pのみの出土で、土師器の破片であった。1・2号住居址と同時期もしくはそれに近接するものと考えられる。



第11図 1号掘立柱建物址実測図

第3節 土 坑

遺構 (第12図～15図) 調査区から56基の土坑を検出した。位置は調査区の北西寄り、1・2号住居址や掘立柱建物址の検出された周辺に多く確認された。各土坑の詳細については、別表(第5表)を参照されたい。

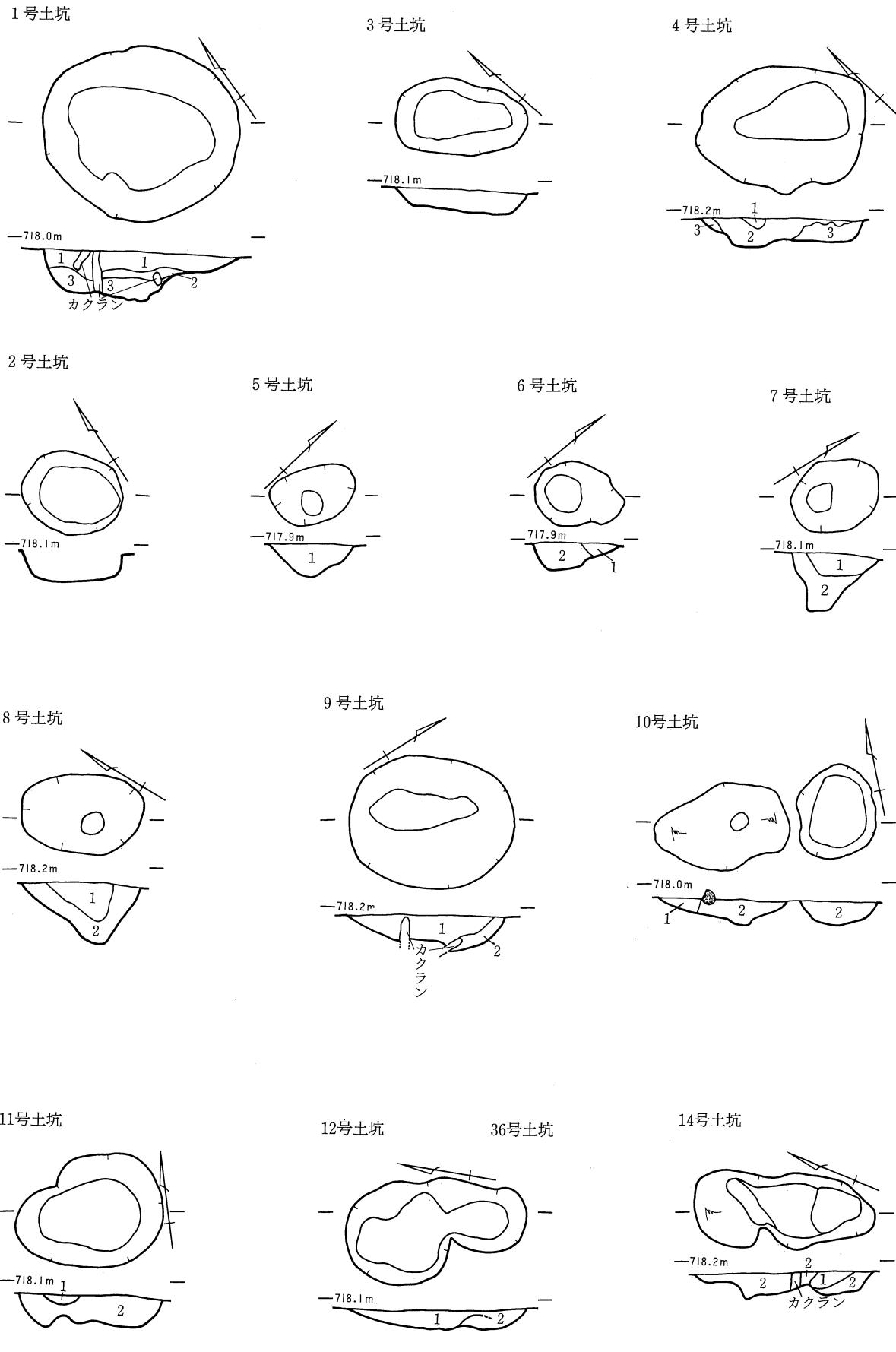
遺物 全体的に遺物の伴出するものは少なく、またその量も目立って多くない。中でも45号・67号土坑からは縄文土器片が、その他数基から須恵器片と土師器片が少量出土している。

第4節 遺構外出土遺物

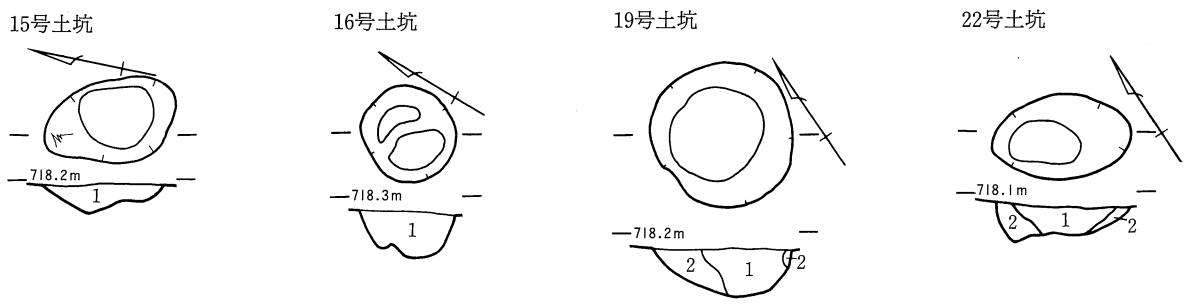
トレンチ掘削時、または遺構上面確認調査時に出土した遺物を総括する。

土器は、縄文土器、土師器、須恵器、陶・磁器がみられる(第16図)。縄文土器は、文様及び胎土等の特徴から、ヘラ状工具によるナデの痕跡がみられる無文土器(1～3)、無節縄文(4)、単節斜縄文(5・6)、単節R L縄文を地文とし、ソーメン状の粘土紐添付後半截竹管状工具により結節状に押引施文されるもの(7～9)、半截竹管状工具による沈線で幾何学的に施文されるもの(10～13)、指頭ないし棒状工具による圧痕を施す隆帯文(14)がみられる。1～9は縄文時代前期末葉に、10～13は前期末から中期初頭、14は中期中葉にそれぞれ比定されよう。ここに掲載された土器は、すべて1～3トレンチからの出土であった。

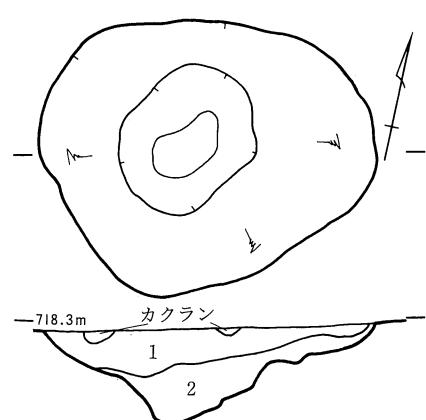
石器は、石鏃(15・16)、調整及び使用痕のある剥片石器(17・18)、打製石斧(19)がみられた。鉄器は、角釘(20)が出土している。



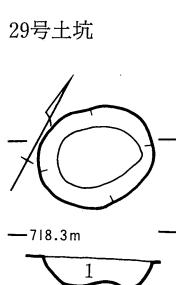
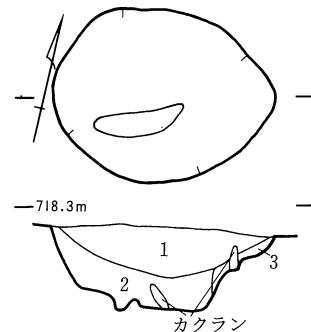
第12図 土坑実測図 1



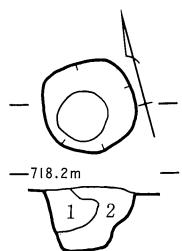
17号土坑



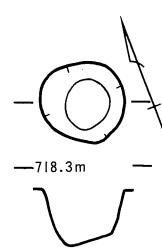
18号土坑



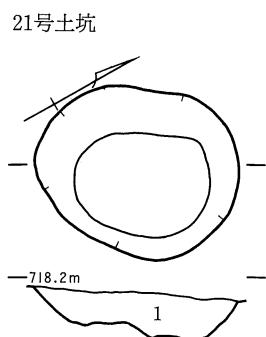
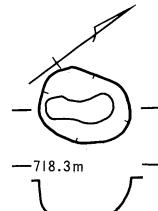
30号土坑



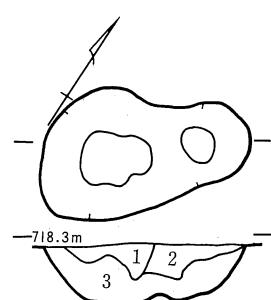
31号土坑



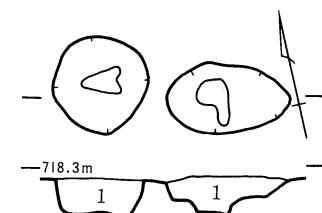
35号土坑



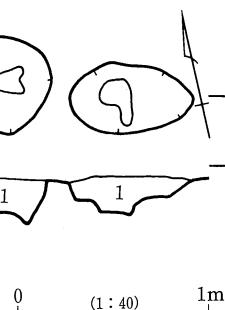
34号土坑



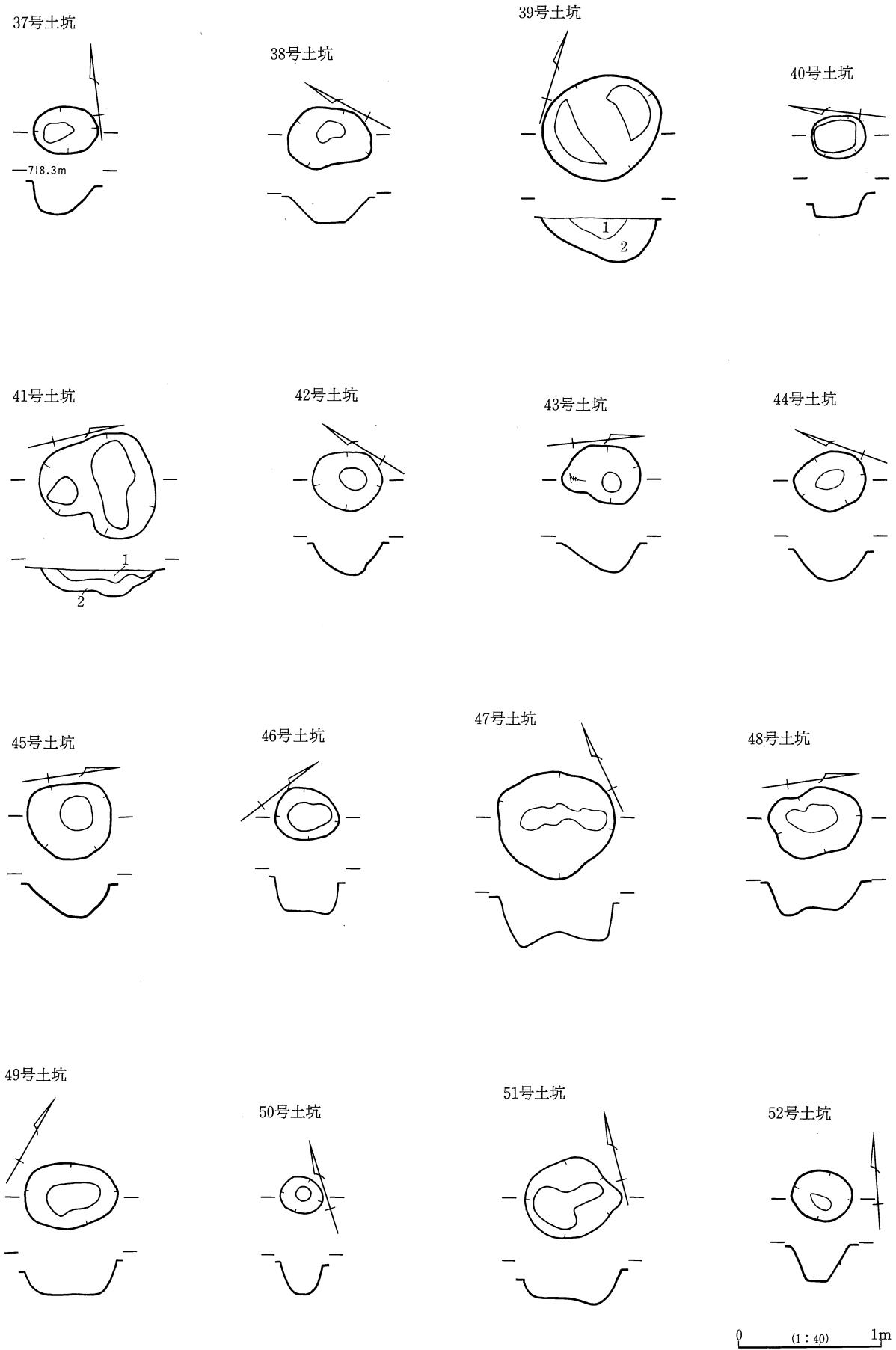
33号土坑



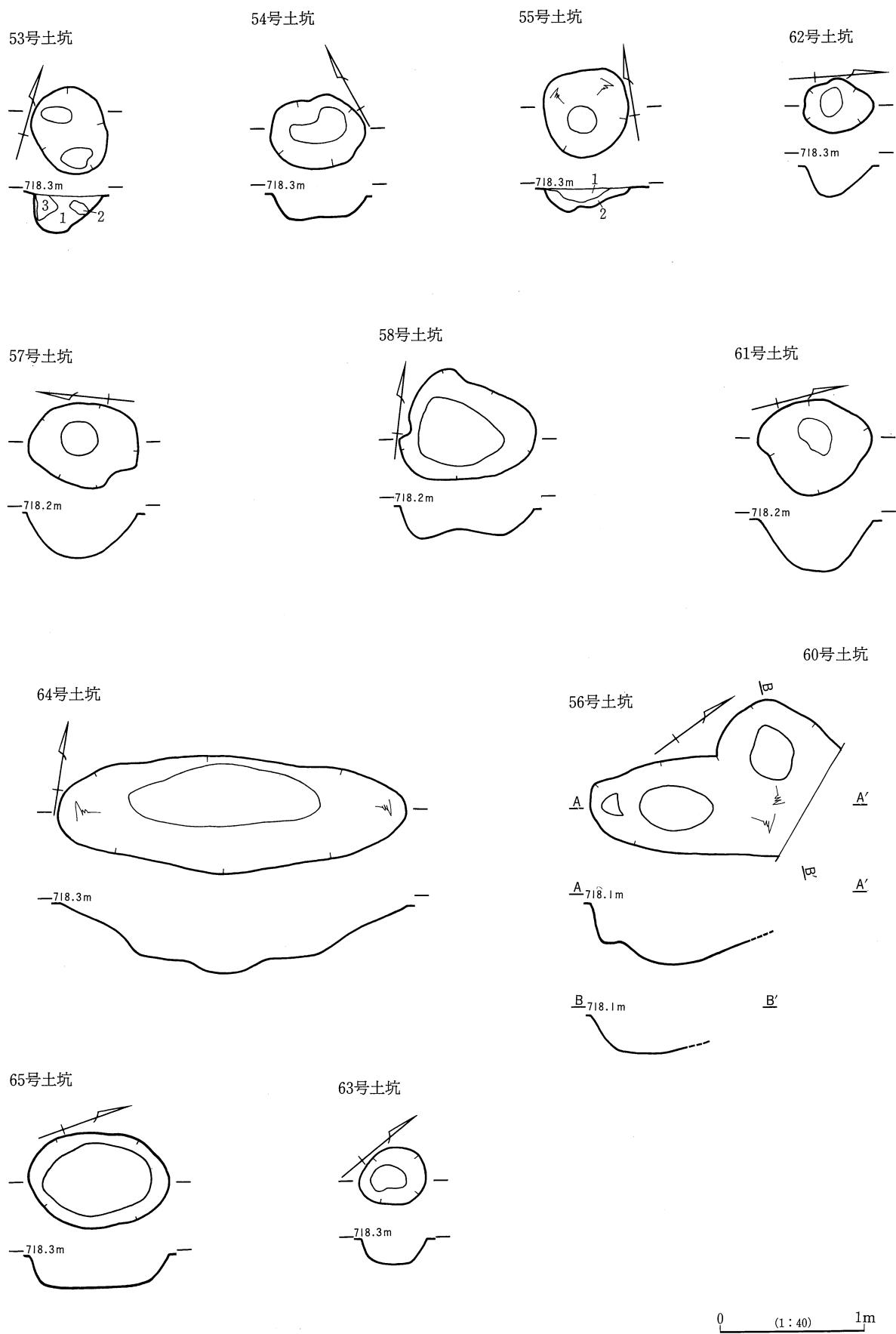
32号土坑

0 (1 : 40) 1m

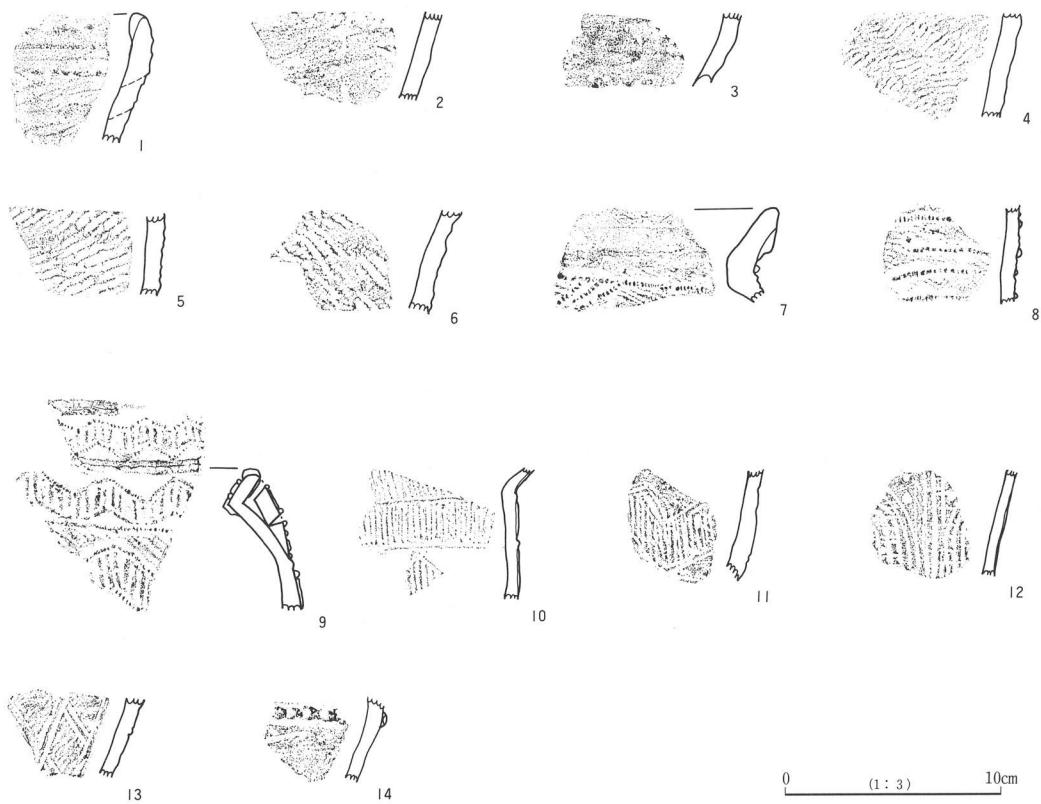
第13図 土坑実測図 2



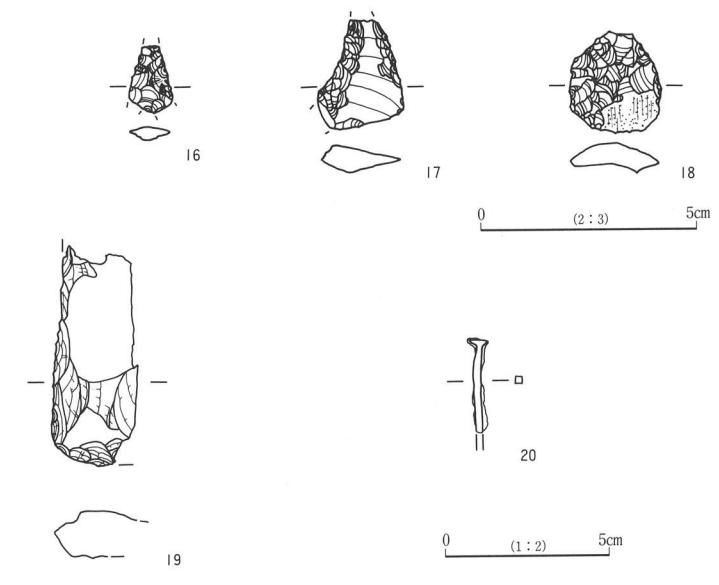
第14図 土坑実測図 3



第15図 土坑実測図 4



0 (1 : 3) 10cm



0 (2 : 3) 5cm

0 (1 : 3) 10cm

第16図 遺構外出土土器拓影図・石器実測図・鉄器実測図

第5表 土坑一覧表

NO	規模(cm)			平面形	断面形	覆 土			備 考
	長	短	深				粘性	締まり	
1	137	122	45	円形	二段構造	1層10YR3/3 (暗褐色) ローム粒子を5%含む。 2層10YR4/2 (灰黃褐色) ローム粒子を20%含む。 3層7.5YR4/4 (褐色) ローム粒子を50%以上含む。	中 強 強	中 中 強	
2	71	56	19	円形	台形	1層7.5YR3/3 (暗褐色) ローム粒子を10%、炭化物を3%、焼土を10%含む。	強	強	
3	92	52	15	楕円形	台形	1層7.5YR4/3 (褐色) ローム粒子を20%含む。	中	弱	
4	120	95	29	楕円形	二段構造	1層7.5YR2/1 (黒色) ローム粒子を1%、炭化物を1%含む 2層7.5YR3/3 (暗褐色) ローム粒子を20%含む。 3層10YR4/4 (褐色) ローム粒子を30%含む。	中 中 中	中 中 弱	
5	58	38	22	楕円形	円形	1層10YR3/2 (黒褐色) ローム粒子を3%含む。	中	中	
6	63	44	18	楕円形	二段構造	1層10YR3/2 (黒褐色) ローム粒子を10%含む。 2層10YR3/1 (黒褐色)	中 中	弱 中	
7	64	50	40	円形	二段構造	1層7.5YR3/1 (黒褐色) 2層7.5YR4/3 (褐色)	強 強	強 中	
8	86	55	42	楕円形	二段構造	1層7.5YR3/1 (黒褐色) 2層7.5YR4/3 (褐色)	強 強	強 中	
9	115	91	25	楕円形	楕円形	1層7.5YR3/1 (黒色) ローム粒子を3%含む。 2層10YR4/6 (褐色) ローム粒子を50%以上含む。	中 強	中 中	
10	153	41	18	不整形	二重構造	1層7.5YR3/1 (黒褐色) ローム粒子を10%含む。 2層7.5YR4/3 (褐色) ローム粒子を20%含む。	中 中	中 中	
11	114	77	22	楕円形	不整形	1層7.5YR4/3 (褐色) ローム粒子を30%含む。 2層7.5YR4/6 (褐色) ローム粒子を50%含む。	中 中	弱 中	
12	(74)	72	13	円形	楕円形	1層5YR3/2 (暗赤褐色) 炭化物・焼土を1%、ローム粒子を30%含む。 2層5YR4/6 (赤褐色) ローム粒子を30%含む。	中 中	中 弱	36号土坑と重複
14	125	48	18	楕円形	二段構造	1層7.5YR3/1 (黒褐色) 2層7.5YR4/3 (褐色)	強 強	強 中	
15	73	45	15	楕円形	二段構造	1層7.5YR4/3 (褐色)	強	中	
16	51	45	25	円形	二段構造	1層7.5YR4/3 (褐色)	強	中	
17	178	141	50	楕円形	二段構造	1層7.5YR3/1 (黒褐色) カクランが縞になって混入 2層7.5YR3/2 (黒褐色) ハードローム粒子を5%、径0.5cmの礫を5%含む。	強 強	強 中	
18	117	91	45	楕円形	二段構造	1層10YR3/3 (暗褐色) ローム粒子を5%含む。 2層10YR4/2 (灰黃褐色) ローム粒子を20%含む。 3層7.5YR4/4 (褐色) ローム粒子を50%以上含む。	中 強 強	中 中 強	
19	77	72	25	円形	楕円形	1層7.5YR4/3 (褐色) ローム粒子を10%含む。 2層7.5YR5/4 (にぶい褐色) ローム粒子を30%含む。	中 中	弱 強	
21	107	86	23	円形	二段構造	1層7.5YR4/4 (褐色) ローム粒子を30%含む。	中	中	
22	74	45	20	楕円形	二段構造	1層7.5YR4/3 (褐色) ローム粒子を30%含む。 2層7.5YR4/6 (褐色) ローム粒子を50%含む。	中 中	弱 中	
29	62	52	15	円形	二段構造	1層7.5YR4/4 (褐色) ローム粒子を30%含む。	中	中	
30	52	48	34	円形	二段構造	1層7.5YR4/4 (褐色) ローム粒子を30%含む。 2層7.5YR3/4 (暗褐色) ローム粒子を5%含む。	強 強	弱 弱	
31	44	42	29	円形	台形	1層7.5YR4/3 (褐色) ローム粒子を20%含む。	中	中	
32	65	36	20	楕円形	二段構造	1層7.5YR3/1 (黒褐色) ローム粒子を5%含む。	中	中	

NO	規模(cm)			平面形	断面形	覆 土			備 考
	長	短	深			粘 性	締まり		
33	52	48	24	円 形	二段構造	1層7.5YR3/1 (黒褐色) ローム粒子を5%含む。	中	中	
34	112	57	31	楕円形	二段構造	1層7.5YR2/3 (極暗褐色) カクラン 2層7.5YR4/3 (褐 色) ローム粒子を10%含む。 3層7.5YR5/4 (にぶい褐色) ローム粒子を30%含む。	強 中 強	強 強 中	
35	49	35	20	楕円形	円 形	1層7.5YR3/3 (暗褐色) ローム粒子を10%含む。	中	中	
36	(56)	45	13	円 形	楕円形	1層7.5YR3/1 (黒褐色) 2層7.5YR4/3 (褐 色)	強 強	強 中	12号土坑と重複
37	47	34	22	楕円形	円 形	1層7.5YR4/6 (褐 色) ローム粒子を30%含む。	中	弱	
38	59	40	18	楕円形	台 形	1層7.5YR3/2 (黒褐色) ローム粒子を20%含む。	中	強	
39	87	73	30	円 形	楕円形	1層7.5YR3/4 (暗褐色) ローム粒子を5%含む。 2層7.5YR4/4 (褐 色) ローム粒子を30%含む。	強 強	弱 弱	
40	39	30	13	楕円形	台 形	1層7.5YR4/3 (褐 色) ローム粒子を20%含む。	中	中	
41	84	58	18	不整形	二段構造	1層7.5YR4/3 (褐 色) ローム粒子を20%含む。 2層7.5YR4/6 (褐 色) ローム粒子を30%含む。	中 中	中 弱	
42	49	41	22	円 形	三角形	1層7.5YR3/2 (黒褐色) ローム粒子を20%含む。	中	強	
43	55	39	20	楕円形	三角形	1層7.5YR3/2 (黒褐色) ローム粒子を20%含む。	中	強	
44	51	43	22	円 形	円 形	1層7.5YR3/1 (黒褐色) ローム粒子を20%含む。	弱	中	
45	60	53	34	円 形	三角形				
46	45	36	23	楕円形	台 形	1層7.5YR3/3 (暗褐色) ローム粒子を10%含む。	中	中	
47	82	74	35	円 形	二段構造	1層7.5YR4/3 (褐 色) ローム粒子を10%含む。	中	中	
48	54	44	24	楕円形	二段構造	1層7.5YR2/3 (極暗褐色) ローム粒子を3%含む。	強	中	
49	66	46	22	楕円形	台 形	1層7.5YR3/2 (黒褐色) ローム粒子を20%含む。	中	強	
50	30	26	22	円 形	円 形	1層7.5YR3/2 (黒褐色) ローム粒子を20%含む。	中	強	
51	69	56	31	楕円形	二段構造	1層7.5YR3/2 (黒褐色) ローム粒子を20%含む。	中	強	
52	42	36	24	楕円形	台 形	1層7.5YR3/2 (黒褐色) ローム粒子を20%含む。	中	強	
53	55	48	30	円 形	円 形	1層7.5YR4/3 (褐 色) ローム粒子を30%含む。 2層7.5YR2/3 (極暗褐色) ローム粒子を3%含む。 3層7.5YR4/3 (褐 色) ローム粒子を30%含む。	強 強 強	弱 中 強	
54	66	49	17	楕円形	台 形	1層7.5YR3/2 (黒褐色) ローム粒子を20%含む。	中	強	
55	65	59	15	円 形	楕円形	1層7.5YR2/3 (極暗褐色) ローム粒子を3%含む。 2層7.5YR5/4 (にぶい褐色)	強 強	中 強	
56	(152)	67	43	楕円形	二段構造	1層7.5YR4/3 (褐 色) ローム粒子を10%含む。	中	弱	60号土坑と重複
57	77	61	32	楕円形	円 形	1層7.5YR4/3 (褐 色) ローム粒子を10%含む。	中	弱	
58	96	68	22	楕円形	二段構造	1層7.5YR2/2 (黒褐色) ローム粒子を3%含む。	中	中	
60	(85)	(72)	25	円 形	楕円形	1層7.5YR4/3 (褐 色) ローム粒子を10%含む。	中	弱	56号土坑と重複
61	72	65	36	円 形	円 形	1層7.5YR2/2 (黒褐色) ローム粒子を3%含む。	中	中	
62	48	36	21	楕円形	円 形	1層7.5YR2/2 (黒褐色) ローム粒子を3%含む。	中	中	
63	47	39	18	円 形	円 形				
64	242	82	48	楕円形	二段構造	1層7.5YR4/4 (褐 色) 小礫を5%含む。	中	強	
65	98	67	22	楕円形	台 形	1層7.5YR3/2 (黒褐色) ローム粒子を10%含む。	中	強	

第6表 遺構外出土石器観察表

No	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重さ	特徴
15	石鏃	黒曜石	(2.0)	(1.2)	0.3	0.7	
16	石鏃	黒曜石	(1.5)	(1.0)	0.3	0.4	
17	剝片石器	黒曜石	(2.5)	(2.0)	0.5	2.3	
18	剝片石器	黒曜石	2.3	2.1	0.5	3.3	
19	打製石斧	粘板岩	(14.6)	(3.8)	(2.1)	99	

第7表 遺構外出土鉄器観察表

番号	器種	法量	重さ	特徴
20	釘	(2.9) 0.2 0.2	1.1	角釘。

第V章 まとめ

本城遺跡における発掘調査は、過去に平成5・6・8年度の3回に渡って行われており、既出遺物と遺跡分布調査結果も合わせ、縄文時代中期初頭・中葉を中心に、弥生時代後期、古墳時代、奈良時代、平安時代、中世の各時代が重複する複合遺跡であることが判っている。遺跡地の中心部は、現在町役場庁舎が位置する河岸段丘の突端部付近と思われるが、その敷地一帯は、室町時代末期から戦国時代にかけて古豪として活躍したとされる松島氏の居城跡として広く知られている。城址並びにそれに関連する遺構のほとんどは、西天竜幹線水路の開設によって始まった開田事業時に、その大部分が失われたものと考えられるが、現在では町指定史跡「松島氏の墓域」のほか、町保健センター北側に僅かながら空堀と土塁の一部が残っており、松島城址の面影を今に伝えている。

今回行った調査箇所は、前回の調査地の隣接地にあたり、遺跡包蔵地の広がりがさらに以西まで及ぶのではないかと予測されたため、その確認をすることが大きな目的の一つでもあった。成果としては、詳細な内容は前章のとおりであるが、検出された遺構や遺物の特徴から、縄文時代前期末葉の遺構の存在を匂わせる遺物散布地であるとともに、奈良時代末から平安時代前期にかけての集落域が、今回の調査箇所の更に以西へ広がることが判り、予想以上の広大な複合遺跡としての認識を深めることになった。前回の成果と合せ、周辺部の各遺跡との関わりとを含めた総合的な視野の中、本遺跡の持つ歴史的意義と性格を探る上で、地域の歴史解明に役立つのではないかと考える。

なお末筆にあたり、調査及び本書の作成に深いご理解とご協力をいただいた、地元松島区の地域住民の皆様、そして直接調査にご尽力いただいた調査関係者の皆様に、本書の刊行をもって改めてお礼申し上げます。

参考文献（編著者名50音順）

- | | | |
|-------------|------|--|
| 谷口 康浩 | 1988 | 『諸磯式土器様式』 縄文土器大観1 草創期・早期・前期 小学館 |
| 長野県教育委員会 | 1987 | 『中央自動車道長野線埋蔵発掘調査報告書1』本文編 |
| 長野県教育委員会 | 1990 | 『中央自動車道長野線埋蔵発掘調査報告書4』総論編 |
| 長野県考古学会 | 1987 | 『信濃における奈良時代を中心とした編年と土器様相』長野県考古学会誌
55、56 |
| 長野県史刊行会 | 1985 | 長野県史 考古資料編 全1巻(3) 中・南信版 |
| 長野県史刊行会 | 1988 | 長野県史 考古資料編 全1巻(4) 遺構・遺物 |
| 箕輪町誌編纂刊行委員会 | 1976 | 箕輪町誌 第1巻 自然・現代編 |
| 箕輪町誌編纂刊行委員会 | 1986 | 箕輪町誌 第2巻 歴史編 |
| 箕輪町教育委員会 | 1992 | 『郷沢遺跡』 |
| 箕輪町教育委員会 | 1997 | 『本城遺跡』 |
| 箕輪町教育委員会 | 1997 | 『箕輪町遺跡詳細分布調査報告書』 |
| 箕輪町教育委員会 | 1998 | 『仲町遺跡』 |

図 版



調査地近景
(調査前・北西より)



調査区全景（北東より）



調査区 土層堆積状況

図版
2



1 トレンチ



1 トレンチ土層堆積状況

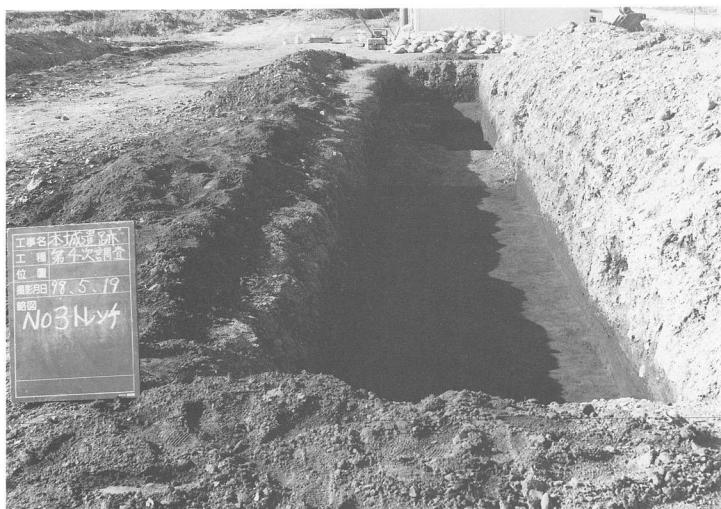


2 トレンチ

2 トレンチ土層堆積状況



3 トレンチ



3 トレンチ土層堆積状況



図

版

4



4 トレンチ



4 トレンチ土層堆積状況



5 トレンチ



5 トレンチ土層堆積状況

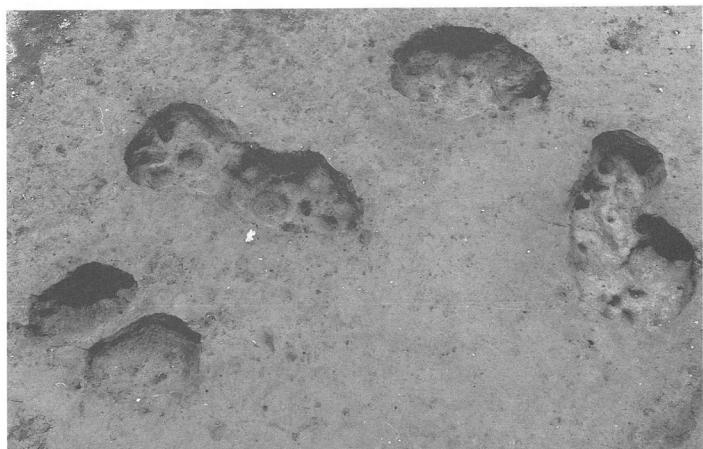


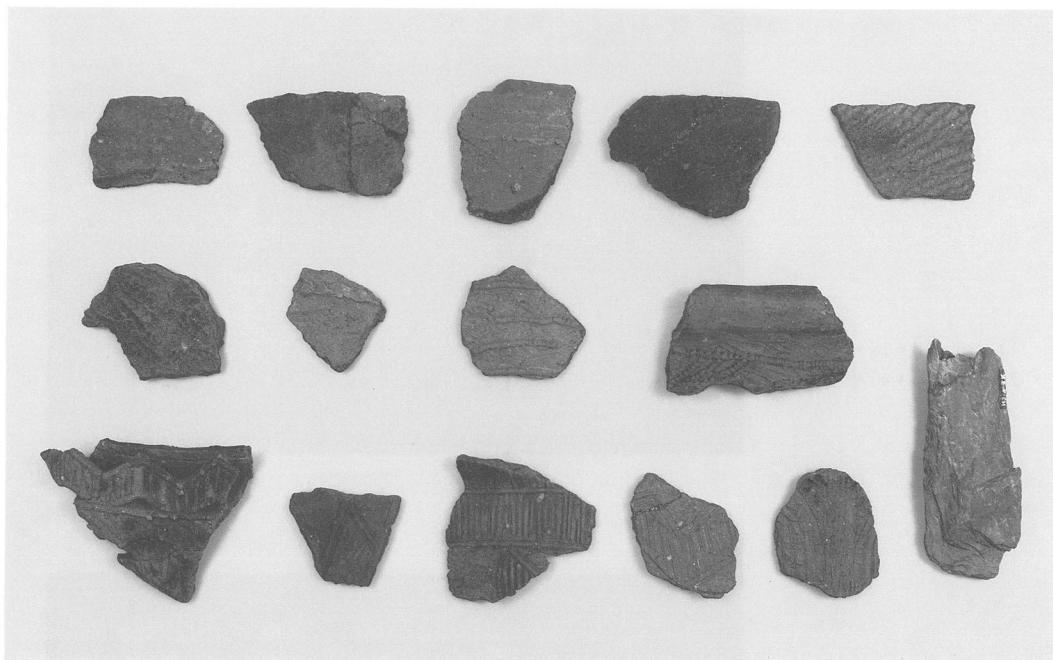
6 トレンチ



6 トレンチ土層堆積状況







遺構外出土縄文土器・石器



遺構外出土石器

出 土 遺 物

報告書抄録

ふりがな	ほんじょういせき							
書名	本城遺跡							
副書名	平成10年度箕輪町社会福祉施設建設事業に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	赤松 茂 根橋とし子							
編集機関	箕輪町教育委員会							
所在地	〒399-4601 長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪10,291番地 TEL 0265-79-3111(代)							
発行年月日	2000年3月31日							
所収遺跡名	所 在 地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	°' "	°' "			
ほん 本 城	ながの けんかみ い のぐん 長野県上伊那郡 みの わ まちおおあざなかみの 箕輪町大字中箕 わ 輪10,275番地 2 他	20383	67	35° 54' 40''	137° 58' 55''	19980420 19980616	3,600	平成10年度町社会福 祉施設建設事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
本城	集落跡	縄文前期 平安時代 中世	竪穴式住居址 掘立柱建物址 土坑	5棟 1棟 56基	縄文土器 土師器 須恵器 陶器 磁器 打製石斧 石鎚 刀子 釘	本遺跡は、中世末期に古豪である、 松島氏の居城跡として知られている。 遺跡地内には、昭和52年に指定された町史跡の「松島氏の墓域」がある。 平成5・6・8年の3回にわたって調査が行なわれている。 その結果、縄文前期より中世までの遺構、遺物が検出された。		

本 城 遺 跡

平成10年度箕輪町社会福祉施設建設
事業に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

2000年3月31日 発行

編集行 箕輪町教育委員会
399-4601 長野県上伊那郡箕輪町10291
TEL 0265-79-3111

印刷本 もえぎ企画書籍
394-0043 長野県岡谷市御倉町2-21
TEL 0266-22-4892
